

源氏物語論

—夕霧造型— (一)

目加田 さくを

源氏物語世界の紀年は七十五年、源氏出生前からとなると、七六・七年となる。紫式部はこれを五十四帖で語りつづける。

初代——桐壺巻、源氏出生前から、出生・少青年期をへて壮年期の
種巻迄、二十帖

二代目の時代——少女巻から、源氏の嫡子夕霧、一女明石姫。昔の頭
中将・内大臣の長女玉鬘、嫡男柏木、後紅梅大臣となる次男、
雲井雁。六條御息所の姫齋宮。朱雀院の女二宮、女三宮。こ
れらの二代目達が初々しく登場し、舞台正面で華やかに活動す
る。源氏は後見よろしく控えながら、彼等とそれ／＼重要なか
かわりをもって行き、遂に生涯を閉じる。幻巻まで二十一帖

三代目の時代——匂宮巻から、源氏の二分身、源氏の末子・実は内
大臣の孫薫と、源氏の孫匂宮、即ち、源氏のみめなる心を純粹
に生きる薫と、源氏のすき心・色なる心を純粹培養した観のあ
る、天下の色好匂宮とが、源氏の弟八宮の遺児三人——大君・中
君・浮舟——をめぐって絡らみあいながら世界は展開する。

光源氏の世界は、永遠につづく運命の一くぎり
として、先ずはひとまず、強いてカットして暮は下りる。夢浮

源氏物語論 —夕霧造型— (一)

橋まで十三帖。計五十四帖である。

光源氏という人間の生涯、光源氏とは、人間の理想型、モデル、
万人がかくもありたいと願う凡ゆる条件——身分・出自・才能・資
質・豊かな心・絶世の美貌・権力・富等々——をみたした、いわ
ば、自己の理想像を假托したのが、光源氏である。したがって、光
源氏の生涯をえがくとは、とりもなおさず、人間の生涯をえがく事
である。理想の私の生涯をえがくことである。この七十五年、七十
六年にわたって、即ち、父母の時代から、源氏の生きた五十三年（幻
は五十二才で終る）、死後二十二年で、光源氏の生を、生き／＼
と形成した。一人の人間の相は、少くとも、その親の結ばれた時か
ら、出生、生涯、その子のそれ、孫のそれ迄、少くとも、脈々となつ
づく血脈の一コマを、三代乃至四代という一時期を切りとって、よ
く／＼眺めてはじめて、把握されうるものである、というのが、紫
式部の人間観の基礎にある。

したがって、夕霧論においても、又、薫論、匂宮論においても、
次の兩様の視座から考察されねばならない。

(一) 夕霧そのものに照明をあてる立場

(一) 光源氏の子、という位相からみる立場、夕霧を包摂した光源

氏論の立場

人間にとって、子とは何か、という問いかけでもある。光源氏と夕霧の場合、紫式部は一つの答を出している。「嫡子への期待」という形であられるが、それは、どういう意味をもつか、である。

(A) もう一人の我(源氏)——我(源氏)の分身、光源氏自身が志向する人間、まめなる人間夕霧。光君はまめなる心、実法なる心を一方向にしかともつていた。しかし、他の色なる心、がより強くはたらく折々があった。彼の理性の声を、彼の肉体は一向にきこくとしなかつた。過失がしばしば生じた。それを源氏は省みて、実法なる夕霧に期待と憧れをもつ。

(B) もう一つの、迎るべかりし我が人生コース

したがって、へて来た道とは違つた人生コースがあつたのだ、まめなる心の夕霧には、それを堂々と闊歩して貰いたい、と願う源氏である。すれば、夕霧の生も、汎くみれば又、源氏の生でもある。

その世界は、即ち我が生の展開、孫のそれも同じく。それを見究めると、我の何たるかがわかる、人間の生がつかめる。紫式部はそう考えたのである。以上を踏まえた上で、夕霧そのものに照明をあててゆこう。拙著、「源氏物語論」でのべたように、紫式部は、人間が棲息するこの宇宙を支配する法則を考えていたようである。筆者はそれらをかかりに、因果律・対偶律・血統律・環境律・偶然律と名づけて考察したのであつた。夕霧論においても、当然の視座として、

第一に血統律——(遺伝的資質)——と、環境律——(家庭・教育

等)——の面がもたねばならぬ。

血統律——父系・母系の、どのような遺伝——資質・容姿・性格等

——をうけて夕霧は生まれたか。父子の相違、父子の対立・対照、或は遺伝と個性の問題が出てこよう。

環境律——どのような家庭環境で夕霧は育つたか。どのような教育をうけ、どのような友人・知人と交つたか。

第二には、夕霧を成長過程においてみなければならぬ、ということである。先ず重視しなければならぬ事は、作者紫式部は、夕霧を成長する人間として、入念に造形していったことである。どのような身分に生れ、どのような資質をもつた子が、どのような環境で、どのように育ち、扱われ、どのように成長していったか、とど、どのような人物になつたか。夕霧はその成長過程が、それ／＼新鮮な印象を与えるように、具象的に形成される。光源氏にはなかつたことである。否、源氏世界では、夕霧以外、何人もこのように、幼年期・少年期・青年期が生彩をもつて丹念に形成され壮年にいたる、というようなことはなかつた。別表。印・印のように、夕霧が主人公となる巻四帖、重要人物乃至、かかわりをもつ巻が計三十一帖。表面には登場しないが、葵巻で出生し、夢浮橋まで夕霧は左大臣として、どつしりと舞台の後見に控えているのであるから、源氏世界では、源氏より長く生身で生きているわけである。源氏は幻巻で52才、その後まもなく世を去つた。夕霧は夢浮橋54才、まだ／＼元氣な権力者である。嫡子夕霧がこのように重視されるのは何故か。そこに、(一)の立場がかえりみられなくてはならぬ意味がある。折々にふれてゆこう。

父源氏は、桐壺一帖で、出生前の父母から、出生、幼年期の母・祖母の死、少年期の教育・元服・結婚。しかも藤壺への思慕、大それた恋の萌しまでが物語られてしまう。したがって、帚木以降は、すでに大人の世界で、しかもいっばしの色好、青年貴公子の多彩な活動にすぎない。幼年期・少年期が甚だ粗畧にすまされた。夕霧では次のように、丹念な所遇である。劃然とわけることは出来ないが、かりに区分してみる。

幼年期 1才〜6才 葵 賢木 須磨
 少年期 7才〜8才 霽標
 少青年期 12才〜14才 少女 玉鬘13才〜14才 初音 胡蝶
 15才〜17才 螢15才 常夏15才 篝火15才 野分
 15才 行幸15才〜16才 藤袴16才 眞木柱16才〜17才
 青年期 18才〜26才 梅ヶ枝 藤裏葉 若菜上下
 27才28才29才 柏木27才 横笛28才 鈴虫29才 夕霧
 29才
 壮年期 30才31才 御法30才 幻31才
 40才〜54才 匂宮40才〜46才 竹河40才〜49才
 總角50才〜蜻蛉53才〜夢浮橋54才
 父は天皇の次男左大将、母は天皇の姪・左大臣長女という臣下第一級の家系嫡男に生れる。父系・母系からうけた遺伝的資質も亦最高。

〔幼年期〕（出生後母死去。母の里邸で祖父母・左大臣夫妻に大事に育てられている。葵1才〜須磨6才） 源22才〜27才

○容姿の美しさ・可愛らしさ (a)〜(g)

- (a)いとゆゆしきまで見え給ふ御有様を今からいと様ことにかしづき聞え給ふ様おろかならず(テキスト、岩波文庫 島津学氏による)
 - (b)御まみの美しさなどの春宮にいみじう似奉給へるを見奉給ひても先づ恋しう思ひ出でられさせ給ふに忍びがたくて参り給はむとて
 - (c)何心なき御笑顔ぞいみじう美しき
 - (d)こよなくおよづけて御笑ひがちにおはするも哀れなり(葵 2才)
 - (e)まみ口つきただ春宮の御同じ様なれば人もこそ見奉り咎むれと見給
 - (f)若君はいと美しうてざれ走りおはしたり「久しき程に忘ぬこそ哀れなれ」とて膝にすゑ給へる気色忍び難げなり(須 5才)
 - (g)若君の何心なくまぎれありきて これかれになれ聞え給ふをいみじと思したり(須 5才)
- 賢く、素直で、明るい性格形成(d)(f)(g)がなされている。
 源氏の夕霧に対する愛情——環境 A
- 十の面
 夕霧出生直後、源氏がいかに大事にしたか——(a)。
 葵上の死によつて、いよ／＼左大臣邸を引き拂う日、女房らに頼む。「昔を忘れざらん人はつれ／＼を忍びても幼き人を見捨てず物し給へ……」。二條の院に帰つても、「朝には若君の御許に御文奉り給ふ……と、左大臣邸に、夕霧の事を問いに使を出す。新年には、元旦、朝賀の帰途、左大臣邸を訪れ夕霧を見る。桐壺院崩。

源氏24才。「大将はありしに變らず渡り通ひ給ひて侍ひし人々をもなか／＼こまか思し掟て、若草をかしづき思ひ聞え給へる事限りなければ哀れに有り難き御心と。……」源氏のとぶらい、配慮は行き届いている。須磨下向の前に、左大臣邸を訪れ(14)と別れを悲しむ。若君の乳母らにも贈物をしておく。源氏が、左大臣邸で育てられている夕霧への心遣いしば／＼言及する。

一の面

(14)赤ん坊の夕霧をみて目鼻たちが春宮に似ているというので、春宮に逢いたくなり参内する。

須磨では、京の愛人達とそれ／＼文を交わし慕いあうが、殊に紫上に対しては心乱れ、「なほ忍びてや迎へまし」と思す程の切ない思いをするが、夕霧に対しては、そうではない。「大殿○の若君の御事などあるにも、いと悲しけれど、自ら逢ひ見てむ、頼もしき人々物し給ば、後めたうはあらずと思しなさるゝは、

なか／＼この道の惑はれ給はぬにやあらむ」母のない一人息子、頑でない子を亡妻の里方において、さして心配しない。世の人の惑ふという子故の闇、「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」には、かえっておまどいにならぬダンディ源氏、自らの恋にのみ心を勞する色好の父として造形する。

地の文で皮肉られるのである。伊勢物語百二五段、平仲物語四十段、子をおもう段はない。元良親王、一條摂政、何れも子をおもふ闇にまどふ野暮な歌など詠まぬ色好達。子に対して、

いくらでも理性的になれるわけである。少女の巻で夕霧教育、任官について、源氏の卓越した子育て論が述べられるが、それが少年の夕霧に通じない。お偉いが冷い、よそ／＼しい父への不満、寂しさを訴へる——祖母宮に——こととなった。母亡し子を、祖母宮、後には花散里にあづけ放して、親しく自分達夫妻の室へはよせつけない父源氏のすげなきにも不拘、ひどくひがみもしない。素直に言われる通り勉強に精進し、史記も四五月であげるような真直さ、眞面目さで：身心共に健やかに育ったのは、祖父母の愛があった、とする。

ここに作者がハッキリ明言するダンディ源氏のつきはなした態度が、夕霧に独立心を養い、夕霧の片意地を培うこととなる、と作者式部は設定をするのである。

左大臣・大宮の愛——夕霧の住居——環境 B

左大臣は、源氏に釘をさす。「思しすつまじき人も、留まり給へれば、さりととも物の序には立ち寄らせ給はじやなど慰め侍るを、^b偏に思ひやりなき女房などは、今日を限りに思し捨つる故郷と思ひ屈して長く別れぬる悲しみよりも……」養上の死後、左大臣邸を去る源氏に対して、a b cと、辛辣な釘を打っておく。この赤子を養育はするが、この子の父は貴下でありますぞ、と源氏に父たる自覚を促がす。「物の序には」は痛烈である。「何かの序には訪れて、この子を見て下さいますな。」とその実行を確約させる。「思しすつまじき人」以下の語調には気魄がこもる。左大臣が、必死で幼孫夕霧のために、言っておくことばである。若い源氏にはこたえる。

左大臣の懸念は将来、事実となる。少女巻で、夕霧と大官が歎くように、夕霧が心のよりどころとしたのは、祖父の大臣であった。恋に心を奪われて暮らす若き日の源氏は、心の一隅にしか夕霧をおいてはいない。

情理かねそなえた祖父左大臣、ひたすらに夕霧がいとしい祖母大官の左大臣邸で、大切に養育されてゆく。母のない幼児は祖父の溺愛に息づいて大きくなる。若い父は時折訪れては、乳母、侍女達に心付、注意を忘れない。幼年期の源氏も亦、母のない子であった。祖母も亡くした。代りに父帝が膝下において、後宮にもつれて廻る溺愛ぶりで養育された。桐壺帝は老いても美色を好み、後宮に佳人を多く集えていたと作者はいう。これでは早熟児ならずとも、いいことは見習わない筈である。宮廷の色好的雰囲気の中で、父帝の体質を遺伝子としてもつ光源氏が、どのような成長をするか、すでに方向は定まっていた。源氏は己の辿ったコースの外に、かくありたきコースを設定した。己と同じく生得の美質をもった夕霧に、同時に又己の有しなかった資質、それは母養上のうるはしき身心を遺伝子としてもつ夕霧に、色好の父から離れたところで起臥させる。左大臣邸は、うるはしき雰囲気、礼節正しい家風で、左大臣夫妻の溢れるばかりの愛情につつまれる夕霧。源氏は己の到りえなかった「重りか」で、「気高く乱れたる所まじらぬ」立派な人間として嫡子夕霧が育つであろう、それが源氏の願望であった。幼い夕霧の住居が、左大臣邸と設定された所以である。

恵まれた幸な子供では一流の人物になれない、式部の人間観である。「母のない子」、その意味で、源氏世界では必然的な条件とな

る。光源氏・夕霧・紫上・玉鬘・宇治大君・中君は、源氏世界の一流の人物、この上なく魅力溢れる、価値ある人間であった。

②少年期 澤標7才〜8才 源28才〜29才

(一)源氏が政界へ復帰した翌年、春宮元服後即位。父は内大臣、祖父左大臣は摂政太政大臣、二人が権力の座につく。夕霧はその正嫡として「大殿の若君は、人より殊に美しうて、内・春宮の殿上し給ふ」、童殿上する。つまり、政界に初舞台を踏む。

(二)秋、父の住吉参詣で、正嫡夕霧の晴姿を描写する。「大殿腹の若君、限りなくかしづきたて、馬添童の程、皆作り合はせて、様変へて装束きわけたり」これを遙かに望見した明石は、「雲居遙かに、めでたく見ゆるにつけても、若君の数ならぬ様にて物し給ふをいみじと思ふ」はばかって船を難波へ漕ぎわたる。夕霧は羨ましがられる身となったのである。美しさと、父源氏にいかん大切にされているか、輝かしい少年期、政界への首途形成である。

源氏の愛した人々、夕顔、葵は早く世を去り、権は高院へ、臘月夜は宮中へ、六條御息所、藤壺も続いて世を去る。権巻迄で初代源氏の華、甘美な恋の時期は終わった。

次の時代は、悩多い報いの時期に入る。源氏は、はじめて色好の報いを味う。恥(コキユ、老、嫉妬)を味う。

その幕明けは、二代目達の初々しい登場からはじまる。

③少青年期 少女12才〜14才 源33才〜35才(年少ながら元服するので少青年とする) 槇柱17才

〔少女〕卷 からは二代目の時代、夕霧の時代に入る。少女の主
人公は夕霧である。

(一)元服 十二才

式場——大宮の三條殿、故太政大臣邸、源氏の大宮への配慮
から。

六位——浅葱の袍

夕霧、大宮の不満。大宮が源氏に抗議する。

強大な存在である父大臣に対して十二才の夕霧は何とも言うこ
とが出来ない。夕霧の不平等、口惜さをぢかに味う大宮が、穏や
かに、執念く、源氏に抗弁する。少々源氏の弁明では納得しな
い。これに対して、源氏は、夕霧の教育についての所信を表明。

(二)夕霧教育——源氏の方針、即ち式部の教育論

「大学の道に暫し習はさむの本意待るにより、今二三年を徒ら
の年に思ひなして、自ら朝廷にも仕うまつりぬべき程にもなら
ば、今、人となり侍らむ。」12才^a 15 16才 大学生として専心
勉学期間「自らは九重の内に生ひ出で侍りて、世の中の有様も
知り侍らず、夜昼御前に侍ひて、僅になむはかなき書なども習
ひ侍りし。唯畏き御手より伝へ侍りしに何事も広き心を知ら
ぬ程は、文才をまねぶにも、琴笛の調にも、音足らず、及ばぬ
所の多くなむ侍りける。」

①自己の教養の限界

帝自身から教わった。帝の知識の範囲内、知識の限界を痛感
した。大学に学ぶ事の必要——汎い教科、四書、五経、

源氏物語論——夕霧造型——(一)

三史、文選、白氏文集、尔雅、律、令等々を専門の博士につ
いて学ぶことが出来る——

②世間、人間社会に対して無知——隔離された宮殿内での教育
は健全な人間、大政治家を育てえない。学友にもまれ、切磋
琢磨して少青年の一時期、二三年を勉学専一にすこす事が、
将来の大成を期する上に大切である。

「はかなき親に賢き子のまさる例はいと難き事なむ侍ればまし
て次々伝はりつゝ隔たり行かむ程の、行く先いと後めたきによ
りなむ、思う給へおきて侍る。高き家の子として官爵心に叶
ひ、世の中盛りに驕り慣らひぬれば、学問などに身を苦しめむ
事は、いと遠くなむ覚ゆべかめる。戯れ遊びを好みて、心のま
まなる官爵に上りぬれば、時に随ふ世の人の、下には鼻まじろ
ぎをしつゝ、追従し、気色をとりつゝ随ふ程は、自ら人と覚え
てやんごとなきやうなれど、時移りさるべき人に立ち後れて、
世衰ふる末には、人に軽め侮らるゝに、かかり所なき事になむ
侍。

猶才を本としてこそ、大和魂の世に用ゐらるゝ方も強う侍ら
め。差当りては心許なきやうに侍りとも、終の世の重しとなる
べき心掟を習ひなば、侍らずなりなむ後も、後安かるべきによ
りなむ、只今は、はかしくしからずながらもかくて育み侍らば
せまりたる大学の衆とて、笑ひ侮る人もよも得らじと思ふ給ふ
る」

貴族の子弟が、親の権威を笠にきて、うか／＼と遊惰に暮らして
いると、親が亡くなったり。政変に遭つたりすれば、惨めな境涯に

おちてしまふ。(菅家後草^夢男女兩助、弁御の好例が作者の脳裏にあつたらう。)日本人としての魂に学力・実力を身につければ、何時いかなる折も恐いものなし。自分の死後も心配はない。と、源氏は諄々と大宮に自己の教育方針を語りまかせせる。賢明な大宮はy、理解し、肯定しながらも、z、執拗に抗弁する。

y
「げにかくも思し寄るべかりける事を、この大将なども、餘り引き違へたる御事なりと傾き侍るめるを、この幼心地にもいと口惜しく、大将、左衛門督の子どもなどを、我よりは下臈と思ひ貶したりしに、皆各々加臈し上りつゝ、およびけあへるに、浅葱をいと辛しと思はれたるが心苦しう侍るなり」

と、伯父も納得していない、と、夕霧の口惜しい心中を訴える。源氏は「『いとおよづけても恨み侍るなりな。いとほかなしや。この人の程よ』とて、いとうつくしと思したり。』学問などして、少し物の心も得侍らば、その恨みは、自らとけ侍りなむ」と聞え給ふ」源氏は嫡子の夕霧を愛する父親の情に基く、深慮、遠謀できめたことであつた。それは夕霧にとつては、厳しく辛い道程であるが、まさに正しかつた。夕霧をつつむ大宮の深い慈愛があつたからである。孫の爲には、源氏にもくつてかかる高貴な皇女は、源氏の教育方針を理解する見識と、しかしながら孫の稚い心をおしむ慈愛に溢れていた。紫式部は、子供の、人間の教育に、理性と慈愛が両輪の輪であることを提示しているのである。理想的なルールがしかれた。齒をくいしばつてそのルールを歩む夕霧を、じつと見守る大宮がいなければ、挫折する、という式部の提示を読者はよみとらねばなら

ない。

この教育論は、源氏の識見、幅汎い人間味を形成するものであるが、同時に、それが当人の源氏よりも、より一層完全な形で夕霧に実施されたことを重視しなければならぬ。

その実施状況

①字をつける式……式場二條院の東院東ノ対

作文会、

②大学入学……夕霧の住居決定、東院——大宮邸へは月三度と限定
家庭教師……実力ある博士

夕霧の反応

「つともりの給ひていぶせきまゝに、殿を辛くもおはしますかな。かく苦しからでも、高き位に上り、世に用ゐらるゝ人は、無くやはある」と一応反撥はするが、「大方の人柄まめやかに、あだめきたる所なくおはすれば、いとよく念じて、『いかにさるべき書ども疾く読み見て、交らひもし、世にも出で立たむ』と思ひて、唯四五月の中に、史記などいふ書は読み果て給ひてけり。」

真面目な夕霧は、素直に父の意を守つて、忍耐がよく努力し、早く勉学をしあげ、官途に登ろうと励む。夕霧の賢明さは、大学課程では、三史^三准^二大経^二であるから史記は七百七十日をかける。それを四五ヶ月とは、いかに優秀な博士を家庭教師としたにせよ、その努力と抜群の頭脳を物語るものである。

③寮試——予行演習と寮試、合格、擬文章生となる。

源氏の期待に呼応して見事な成人をとげた夕霧。これで一安心し

て恋に入る。

(三)初恋 夕霧12才 雲井雁14才——

筒井筒の初々しい恋の形成。源氏にはなかつた宝玉のような清純な恋である。これを引き裂く内大臣は俗悪な大人として登場。

①脇腹の娘をあづけつ放しで、滅多に母邸を訪れない息子——

権力者の不様な裏面——

②帰るふりをして又そつと立ち戻つて女房を口説いた帰りに立

聞く——権力者の不様な実体

③短慮・軽卒な言動——母大宮にさへ反撥・批判される。

宮はいとほしと思す中にも、男君の御かなしきは勝れ給ふに

やあらむ、かかる心のありけるもうつくしう思さるゝに、情なくこ

よなき事のやうに思し宣へるを、などかさしもあるべき。もとより

いたう思ひつき給ふことなくて、かくまでかしづかむとも思したら

ざりしを、我がかくもてなしそめたればこそ、春宮の御事をも思し

かけたため。取外してたゞ人の宿世あらば、此の君より外に優るべ

き人やは、かたち有様より初めて等しき人あるべきかは。これより

及びなからむ際にもとこそおもへと、我が志の勝ればにや、大臣を

怨めしう思ひ聞え給ふ御心の中を、見せ奉りたらば、まして如何に

恨み聞え給はむ。

無視していた娘を母宮に育てさせて、立派になったのをみて春宮入内と野心を抱いた内大臣。母宮はそれを冷静に眺める。夕霧で最高ではないか。夕霧は雲井雁以上の皇女を妻にもとめてやりたいくら

源氏物語論 — 夕霧造型 — (一)

いだ、と内大臣を恨む。別れに際しても大宮は、「今更に見捨てて移ろひ給ふや何方ならむと思へば、いとこそ哀れなれ」といつて泣く。嫉妬深く激しい四の君が北方である。その継母北方のもとに引きとられる雲井雁が哀れだと泣くのである。浅慮の父内大臣は考えも及ばぬ事である。俗物の大人と対照的に、少年少女の恋はあどけなく美しい。そういう恋を体験させ、それを成長させる。主人公源氏に形成すべかりし恋であるが、作者は、源氏には不倫の苦しい恋というテーマで到底した。そのテーマと、少年少女のこの恋のテーマとは両立しえない。したがって、不倫をとつたのである。そこで、夕霧に、このテーマが当然形成されることとなる。

四 侮辱

別れをしている二人の傍へきた雲井雁の乳母はいう。「いでや憂かりける世かな……めでたくとも、物の初めの六位宿世よ」と呟くも仄聞ゆ……男君、我をば位なしとはしたなむるなりけりと思すに、世の中怨めしければ、哀れも少しさむる心地して目覚し「くれなるの涙に深き袖の色を浅緑とや言ひ絞るべき」夕霧は生れてはじめて、手痛い侮辱を加えられる。しかも愛する人の前で、別の一刻の折に。これは永く彼の心の傷として残ることとなる。意地の強い夕霧形成の要因となった。

(四)第二の恋——五節

惟光女との出あい。父惟光の賛成と予見。「明石入道の例にやならまし」この恋も成長し、開花する。(後篇で匂宮北方となる六君の母である。)作者は、まめ人夕霧の恋を三人に限定した。惟光が予見したように、惟光女の子は立派な人々となる。

内東院西ノ对花散里に夕霧の後見を依頼

仄かになど見奉るにもかたちのまほならずもおはしけるかな。かかる人をも人は思ひすて給はざりけりなど、我があながちに辛き人の御かたちを、心にかけて恋しと思ふも味気なしや。

心ばへのかやうに柔らかならむ人をこそ相思はめと思ふ。又、向ひて見る甲斐なからむいとほしげなり。かくて年経給ひにけれど、殿のさやうなる御かたち、御心と見給うて、浜木綿ばかりのへだてさしかくしつゝ、何くれともてなし紛らはし給ふめるも、うべなりけりと思ふ心の中ぞ、恥かしかりける。大宮のかたち異におはしませど、まだいと清らにおはし、此処にも彼処にも人はかたちよきものとのみ目馳れ給へるをもとよりすぐれざりける御かたちの稍さだすぎたる心地して瘦々に御髪少ななるがかくそしらはしきなりけり

源氏の「唯宣ふま々の御心にて懐かしう哀れに思ひ扱ひ奉り給ふ」花散里に対しながら、二つの恋を体験した夕霧が、父の愛情生活を参考に、胸中ひそかに、異性について思いめぐらす。大人が知つたら吃驚する程、夕霧は真正面から考えてゆく。

(出)大宮と歎く夕霧

年の暮に正月の晴着をしあげる祖母に夕霧は「朔日などには必ずしも内裏へ参るまじう思ひ給ふるに何にかくいそがせ給ふらむ」といふ。(a)「男は口惜しき際の人だに、心を高くこそ遣ふなれ。あまりしめやかにかく物し給ひそ。何かかう眺めがちに思ひ入れ給ふべき。ゆゝしう」と大宮はたしなめ、教訓する。それに対し夕霧は思

つている事を吐き出してしまふ。

「何かは。六位など人の侮り待るめれば暫しの事とは思ふ給ふれど、内裏へ参るも物憂くてなむ。故大臣おはしまさしかば戯れにても人に侮られ侍らざらまし。物隔てぬ親におはすれどいとけ、しう差放ちて思いたればおはしまず辺にたやすくも参りなれ侍らず。東の院にてのみなむ御前近く侍る。対の御方こそ哀れに物し給へ。親今一所おはしまさしかば、何事を思ひ侍らまし」とて涙の落つるを紛らはし給へる気色いみじう哀れなるに官はいとごほろ／＼と泣き給ひて「母に後るゝ人は、程々につけてさのみこそ哀れなれど、自ら宿近々々に人と成り立ちぬれば、おろかに思ふ人もなきわざなるを思ひ入れぬ様にてを物し給へ。故大臣の今暫しだに物し給へかし。限りなき蔭には同じ事と頼みきこゆれど思ふに叶はぬ事の多かるかな。内の大(1)臣の心はへもなべての人にはあらずと世の人もめでいふなれど、昔に變る事のみ増りゆくに命長さも怨めしきに、生ひ先遠(2)き人さへ、かくいさゝかにても、世を思ひ沈り給へれば、いと(3)なむ万づ恨めしき世なる」とて泣きおはします。

夕霧は源氏の嫡男として。人々の尊敬羨望の的であった自己が、成人式後、一介の六位にすぎない立場に擲然とする。下にみていた同輩が皆上位者である。その下につかねばならぬ屈辱の感情。それも学問をして実力をつける二三年の辛抱と、父の言を理解する賢こ

さ、理性をもつが、どうにも宮中へ参内したくない情なき、それは父にいえぬ。祖母大宮へだけである。(7)(8)の愚痴となる。源氏の立派な教育方針も、実は、半分は大宮の助力をかりねば成功しえないものであることを子は感知している。夕霧は指摘する。父の教育方針はいい。しかし、父の愛情はどこにあるのだ。(9)「いとけしう差放ちて思いたれば……」親として失格である。故太政大臣と大宮まかせではないか。花散里のところには出入りする、(10)しかし、である。懂れるのは継母紫上であるが近づけない。(11)。お母様が生きておられたら、(12)と鬱積するものを吐き出す。

大宮は、(a)しかるべき訓戒もする。その理性、見識をもつ反面、(b)(c)(d)(e)と繰り返言を言つてなく。実は夕霧と同じ恨みなのである。この語らいによって、夕霧は、ホッと息をつくことが出来る。辛い目に遭わせて、休ませて、又夕霧を鍛えるのが作者である。寂しい刻苦勉勵の時期も終りに近づく。

(八)進士となる。13才秋の司召に任侍従。五位。晴れて任官である。14才六條院丑寅の町に移転。花散里の介添役を十分果す。夕霧の洋々たる前途が拓けてくる。

「侍従の君添ひて、其方はもてかしづき給へばげにかうもあるべき事なりけりとみえたり」

此の時から、夕霧は花散里に後見(養育)されるのでなく、身の廻りの世話をして貰う意味の後見にすぎなくなる。今後は次第に六條院の正嫡夕霧が花散里の後見にまわる、というように立場が逆になつてゆく。夕霧の成長である。

玉鬘

14才 六條院の嫡男として、見事な成長ぶりをみせる。

十月六條院に玉鬘が引きとられる。これも「東の御方に聞えつけ奉り給ふ」であるが、源氏は夕霧に、姉として引きあわせる。すると、夕霧の反応は見事である。

中将の君にも「かかると尋ね出でたるを、用意して睦が訪らへ」と宣ひければ、此方に参うで給ひて、「人数ならずとも、かかる者侍ふと、先づ召し寄すべくなむ侍りける。御渡りの程にも、参り仕う奉らざりける事」と、いとまめくしう聞え給へば、

六條院の嫡男として、一かどの挨拶をするのである。外腹の姉玉鬘にとつて、自分は義弟である。御引越の御世話を御命じ下さるべきでしたのに、御手伝も致しませんで！当院の嫡男としての態度が出来ている。大学の学問は身についた。義理礼節を弁えた人物に成長していたのである。

初音 15才 源氏36才

源氏は息子自慢をする。

「中将の声は、弁の少将にをさく、劣らざるは。怪しく有職ども生ひ出づる頃ほひにこそあれ。古の人は真に賢き方や勝れたる事も多かりけむ。情だつ筋は、この頃の人にえしも勝らざりけむかし。中将などをば、直々しき公人にしなしてむとなむ思ひ掟てし。自のあざればみたる頑なしさを、もてはなれよと思ひしかど、猶下には仄好きたる筋の心をこそ留むべかめれ。dもて鎮め、すくよかなるうはべばかりは、うるさかめり」

など、いと美しと思したり。

a 真面目な官吏にしあげようときめていた

b それは私の色好のこまった所なんか持つなよと期待してのことであつた

c しかし、心配はいらぬ石部金吉ではないらしい。内々異性に關心を抱いているらしい

d だが、あのとりすました謹厳な表面はどうだ、大したもんだと、音楽の才もその名門内大臣家の令息に劣らぬ、期待どおりに成長した夕霧がいとしく、つい口数多く誇らしげにけなす——自慢するのである。

胡蝶 15才三月二十余日

「春の上の御志に佛に花奉らせ給ふ」折に、消息は夕霧の「中将して聞え給ふ」である。

六條院春の御前の華麗な絵巻の中で、秋の御殿で行われる中宮の御詠経に、春の殿から、秋の殿への晴の使者は鳥蝶に装束きわけたる童八人——（鳥の童は銀の花瓶に桜、蝶の四人は金の花瓶に山吹をさしてもつ）——を従えて、春の御前の池を漕ぎ出して秋の御殿の前で泊まる。鳥の童と蝶の童八人が、花瓶をそれ／＼行香の人々に手渡す、それを閑伽棚に捧げる。廊から吹きたてる楽の音の中で夕霧は紫上の御消息を伝える。まさに六條院の花形である。賢く美しい貴公子。しかもまじめ。

夕霧の生面目さが強調される。外腹の姉と紹介されても源氏ならばこうはいかぬところである。

殿の中將は少し気近く、御簾の下などにも寄りて、御答へ自ら

聞え給ひなどするも、女は慎ましう思せど、さるべき程と人々も知り聞えたれば、中将は直々しくて思ひも寄らず

螢 15才夏 夕霧と明石姫

中将の君を此方には気遠くもてなし聞え給へれど、姫君の御方にはさし放ち聞え給はず習はし給ふ。我が世の程は、とてもかくても同じ事なれと、亡からむ世を思ひやるに、猶見つき思ひ染みぬる人どもこそ、取りわきては覚ゆべけれどと南面の御簾の内は許し給へり。台盤所の女房の中は許し給はず。数多おはせぬ御中らひにて、いとやんごとなくしづき聞え給へり。

大方の心用ゐるなども、いともの／＼しく、まめやかに物し給ふ君なれば、後安く思し讓れり。

異腹の妹明石姫と夕霧が睦ぶように源氏は方向づける。

(一)○雲井雁への思いと夕霧の意地

まだいわけたる難遊びなどの気はひの見ゆれば、かの人の諸共に遊びて過しし年月の、先づ思ひ出でらるれば、雛の殿の官仕いとよくし給ひて打潮垂れ給ひけり。さもありぬべき辺には、
a はかなしごとく宣ひふるゝは数多あれど、頼みかくべくもしな
b さず、さる方になどか見ざらむと、心とまりぬべきをも、強ひ

てなはざりごとくにしなして、猶かの緑の袖を、見え直してしが
c
d
なと思ふ心のみぞ、やんごとなき節には留まりける。強ちになどか／＼らひ惑はば、例るゝ方に許し給ひもしつべかめれど、

e

辛しと思ひし折々、いかで人にも謝ことわらせ奉らむと、思ひ置きし事忘れ難くて、正身ばかりには疎ならぬ哀れをつくしみせて、大方には焦られ思へらず。兄の君達なども、なま妬しなどのみ思ふ事多かり。対の姫君の御有様を、右の中將はいと深く思ひしみて言ひ寄るべき便りもいとかなければこの君をぞかこち寄りけれど「人の上にては、もどかしき業なりけり」とつれなくいらへてぞ物し給ひける。昔の父大臣達の御中らひに似たり。

夕霧は雲井雁との中をせかれたまゝの状態で、他の女性と交際をしても本気なものと思わせないように心がけている。a b. あくまでも雲井雁との恋の成就を念じている。しかし、「六位宿世よ」と侮辱されたことへの反撥から、出世して、先方に一言託を言わせないことには結婚すまいと覚悟している。今でも、無理に申しこめば、いや／＼許されぬことはないと承知しながら、此方から頭を下げてゆこうとは思わぬ。姫には手紙をかいて気持を通じているが、表面はそしらぬていをつづけ、妹の結婚を案ずる彼女の兄達をじらしている。

夕霧のこの意地つ張り、源氏系の意地に葵上系の遺伝が加わって一層強固なものとなり、物事に万事、黒白のけじめを重んずる左大臣家の気風がうけつがれて、「ことわらせて」の思考が生れる。若き日の源氏のように、くづれてしまふ、ひたぶるの色好ではない。夕霧のような生き方こそ、作者式部が「少青年のあらまほしき

恋の姿」として形成したものに外ならぬ。清々しく凛々しい、かげで文を通はしながらとは、賢い恋ではある。その道の達人源氏には「うはべは……下には……」と見ぬかれている。所詮十五才である。

常夏 15才夏

夏の一、東の釣殿で涼む源氏。中將も友人の内大臣家の君達と一坐する。「夕つけ行く風いと涼しくて帰り憂く若き人々は思ひたり。心安く打解け休み涼まむや。やう／＼斯様の中にも厭はれぬべき齡にもなりにけりや」といって、西の対に渡れば、君達は随行する。源氏は玉鬘に「少し外出で給へ」とて忍びて「少將待従などゑて参うできたり。いと翔り来まほしげに思へるを、中將のいと実法の人にてゐて来ぬ、無心なめりかし」という。夕霧は生真面目で、玉鬘に心よせる友人達を、此處へ伴うような粋な計らいもしてやらぬ、とげなす。咲き乱れる瞿麦を心のまゝにも採らぬ貴公子達を眺めて

A 「有職どもなりな。心用るなどもとり／＼につけてこそ目易
B けれ。右の中將はまして少し静まりて、心恥かしげき勝りたり。
C
D
いかにぞ……」など宣ふ。中將の君は、かくよき中にも勝れてをかしげになまめき給へり。「中將を厭ひ給ふこそ、大臣は本意なけれ。交り物なくきら／＼しかめる中に、王だつ筋にて、かたくななりとや。……」幼きどち、結びおきけむ心も解けず、年月隔て給ふ心向の辛きなり。まだ下臈なりと世の間耳軽しと

思はれば、知らず顔にて此處にまかせ給へらむに、後めたうはありなましや」とうめき給ふ。

源氏は集うている貴公子達（夕霧は中でもすぐれている）をAと褒める。この評は重い。価値判断に厳しい源氏が下した評である。内大臣嫡男柏木をB賞讃し、玉壺へ文を贈るかたとづねる。姉弟と知っている源氏の底意地の悪さである。玉壺を若い人々の心を悩ます種にしようという、色好源氏の、青年の恋を弄んで楽しむ心である。この色好の目には、夕霧が玉壺のもとに友人達を伴って来ぬのは、野暮で思いやりがないと映る。このコントラストが、夕霧のまじめさ、純粹さを際立たせる。源氏のHの非難めいた表現が実は夕霧のまじめさ礼讃なのである。この夕霧に許さぬ内大臣の頑固さを歎く源氏の胸中は即詠者の共感をうる。夕霧は源氏の目にも理想の貴公子として成人したとするのである。

篝火 15才

六條院は夏の御殿で合奏。和琴源氏、夕霧笛。和琴柏木、笛夕霧、弁少将拍子、謡。夕霧は音楽の才能も相当になった。

野分 15才 夕霧の紫上に対する思慕

理想的な公達夕霧の、純情、清潔な目に映った紫上は(a)清純、匂うように美しい若夫人である。野分の見舞に、父の御殿、祖母大宮の三條宮、養母花散里の東の殿を律儀に訪れ歩く中、偶然に紫上の姿を目にすることが出来る。

中将の君参り給ひて東の渡殿の小障子の上より、妻戸のあきたる間を何心なく見入れ給へるに……(a)気高く清らに、さと打匂ふ

心地して春の曙の霞の間より、面白き榊桜の咲き乱れたる見る心地す。味気なく、見奉る我が顔にも移りくるやうに、愛敬は匂ひ散りて文なく珍らしき人の御様なり……大臣のいと気遠く遙かにもてなし給へるは、かく見る人たゞにはえ思ふまじき御有様を、いたり深き御心にて、もしかゝる事もやと思すなりけりと思ふに、(b)気はひ怖ろしうて立去るにぞ……(c)立てる所のあらはになれば怖しうて立ち退きぬ。今参れるやうに打声作りて賢の子の方に歩みいで給へれば

(a)美しさへの感動、(b)継母なる人の美に恍惚となつた我への恐怖
(c)15才 とも思われぬ賢い夕霧の知慧

年頃かかる事の露なかりつるを、風こそげに蔽をも吹きあげつべきものなりけれ。さばかりの御心どもを騒がして珍らしく嬉しき目を見つるかなと覚ゆ

憧れの人、紫上を見る事の出来たよろこび。

源氏の見舞の詞をもつて、三條の大宮の許へ走る。

道すがらいろいろみする風なれどうるはしく物し給ふ君にて、三條の宮と六條の院とに参りて御覽せられ給はぬ日なし。内裏の御物忌などに、えさらすこもり給ふべき日より外は、忙しき公事、節会などの暇いるべく、事繁きに合せても、先づこの院に参り、宮より出で給ひければ、まして今日、かかる空の気色により風の騒にあくがれありき給ふも哀れに見ゆ

夕霧は、すでに若き日の源氏、頭中将とも又ことなり、うるはし

くものし給ふ君、礼儀正しく誠意の人、稀なる律儀者として成人した。毎日六條院と三條の宮に顔を出す。まして野分に吹かれながら三條の宮にかけてゆく姿を作者は「あはれ」と感動をこめて形成する。作者の夕霧像への肩入れがうかがわれるところ。

「紫上への思ひ」

中将夜もすがら荒き風の音にもすゞろに物あはれなり。心にか
けて恋しと思ふ人の御事はさしおかれて、ありつる御面影の忘
られぬを、^gこは如何に覚ゆる心ぞ。あるまじき思ひもこそ添
へ。^hいと怖ろしき事と、自ら思ひ紛らはし、他事に思ひうつれ
ど、猶ふと覚えつゝ、来し方ゆく末ありがたくも物し給ひける
かな。^jかゝる御中らひに、いかで東の御方、さる物の数にて立
ち並び給へらむ。たとへなかりけりや。あないとはしと覚ゆ。
大臣の御心ばへをありがたしと思ひしり給ふ。人柄のいとまめ^k
やかなれば、似気なさを思ひよらねど、さやうならむ人をこ
そ、同じくは見て明しくらさめ。限りあらむ命の程も、今少し
は必ず延びなむかしと思ひ続けらる。

夕霧の自省、自己抑止

異変が起る^f、雲井雁のことはさしおかれて、かいまみた紫上の面影ばかりが浮ぶ。これに対し、^gと己が心をたしなめ、抑止をかける。三度^h怖ろしである。清潔な少年の心である。忘れる努力をするⁱ。しかし又浮ぶ面影。花散里の事を気の毒に思い、その面影

をみる父源氏の大人の恋にふれた思がする^j。夕霧の成長である。そして、^k夕霧は、まじめな人間だから——光君みたいなことにはならず、——似げなさ、継母への恋の実験など思いもよらぬが、ああいう人をこそ妻としたい。限りあらむ命も……と妙に感傷的になる。

朝、春の殿を訪れ、父夫妻が格子もあげずに籠っている殿の外で。荒れた庭をみながら、「そこはかとなく涙の落つるを押拭ひかくして打咳」く。「御簾ひきあげて入り給ふに短き御几帳引きよせてはつかに見ゆる御袖口はさにこそはあらめと思ふに胸つぶ／＼となる心地するも、うたてあれば、外さまにみやりつゝ、夕霧は、このようにして、己が心を、「うたて」と思い、抑えつづけてゆく。支度を了えて出てきた源氏は「中将の眺め入りとみにもおどろくまじき気色にてゐたまへるを、心とき人の御目にはいかゞ見たまひけむ、立ち帰り」紫上に注意する。他方夕霧は、渡殿の戸口にいる女房達に、わざと陽気に「物などいひたはぶるれど、思ふ事の筋々歎かしうて例よりもしめりたまへり」と苦しい夕霧の自己抑止の姿を、こまやかに、入念に形成する。

夕霧は、玉鬘にふざける父の態度を見咎める。

いであなうたて。如何なる事にかあらむ。思ひよらぬ限なくおはしける御心にて、もとより見馴れ生ほしたて給はぬは、かかる御思ひも添ひ給へるなめり。うべなりけりや。あなうとましくと思ふ心も恥し。

夕霧は、大人として立派に成人したと源氏は判定した。その彼が、父を批判する立場に立つ。異性に対する様々の接し方を知る。紫上

に、花散里に。娘と言う玉臺に対しての怪しからぬ態度。夕霧はその事情をあれこれ憶測した上で、猶かつ、うとまし、うたて、と否定する。即ち、子は大人の立場から父を批判しはじめたのである。紫上への思慕を抑える夕霧には、その資格が備ったのである。

料紙の事で女房達に注意されても、^①「さばかりの色も思ひわかざりけりや。何處の野辺の花よ」など「かやうの人々にも、言少なに見えて、心解くべうもてなさず、いとすぐすぐしう気高し」^②ピシヤリととめる。光君とは甚だ違つた^③^④^⑤である。左大臣家、葵上系の遺伝が強く出てくる。女房風情に馴れ／＼しいのは色好のさま。言少なにいとすぐすぐしう気高し、こそは、源氏世界の御曹司として、源氏もかくあれかしと願うところの、理想の姿、と紫式部は形成する。(つづく)